

- 太平洋戦争突入の運命を決めた昭和15年9月
 - ▽第2次近衛文麿内閣(15年7月22日)は
 - 日独伊三国同盟を締結(9月27日)
 - 米英の経済圏に入ることによって生存できるのに肝心な基本条件を忘れ 敵対する態度を
 - ▽北部仏印に 進駐して(9月23日)
 - 重要資源を南方に求める 武力南進の姿勢

- 日米戦争から引き戻す最初のチャンスが独ソ戦争の勃発(16年6月22日)
 - ▽第2次世界大戦の戦略構造に 革命的な変化
 - 局外にあったソ連を 否応なしに 米英の陣営に
 - 「枢軸国対連合軍」最終的構図が 出来上がる
 - ▽松岡洋右外相が 三国同盟に期待し
 - 日ソ中立条約(16年4月13日)を 結んだのも
 - ソ連を入れた四国同盟で 米英に対抗し
 - 最終的には 日米和解に 持っていく狙い
 - ▽「松岡構想」が 一夜にして 崩壊した
 - 三国同盟は 存在価値を 失ったも同然だった
 - ▽日本は「約束と違う」と 三国同盟を離脱
 - 対米関係改善の 選択肢があったのに…
 - ▽政府 軍部内の議論は「北進」か「南進」か
 - 三国同盟離脱は 議論らしい議論もなく
 - 南部仏印に進駐(7月28日)し
 - アメリカの 石油全面禁輸(8月1日)を招き
 - 対米戦争しかないという 袋小路に

- 国際情勢が激動し、幾つかの幻影が現われては、次々と消えていった
 - ▽幻影に終わらせないためには 的確にとらえ
 - 必要と認めたら すぐ 軌道修正しなければ
 - ▽国際情勢を 客観的に 世界的視野で見る
 - リーダーは 政府にも軍部にも いなかった
 - ▽この時期に 特徴的なことは
 - 物事の判断が 極めて 主観的であり
 - 何でも 日本に有利なように 解釈したこと
 - ▽国策決定に当たって 最後まで
 - しがみついたのが「ドイツ勝利」の幻想

近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和8年貴族院副議長。12年第1次内閣を組織し支那事変で「国民政府対手ニセス」と声明、解決の道を塞ぐ。15年第2次内閣で大政翼賛会を結成、日独伊三国同盟を締結し、枢軸外交、南進政策を推進した。16年7月松岡外相を更迭して第3次内閣を組織したが、日米交渉打開に行き詰まり10月総辞職。戦後、戦犯として出頭命令を受け服毒自殺

松岡 洋右(まつおか・ようすけ)

明治13(1880)～昭和21(1946)山口県生まれ、実家が倒産し13歳で渡米、苦学してオレゴン大卒。外交官試験(明治37年)に合格、総領事になったが大正10年退官。満鉄理事、副総裁を経て昭和5年政友会代議士。8年国際連盟代表となり満州国否認に抗議し退場、国民的英雄に。10年満鉄総裁。内閣参議の後15年第2次近衛内閣外相。三国同盟締結。16年日ソ中立条約調印。対米強硬姿勢を主張し更迭。A級戦犯で起訴されたが肺結核で病死

— ドイツは背信の連続だった —

日独防共協定(昭和11年11月26日調印)には「相互の同意なくして、ソ連との間に一切の政治協定を結ばない」ところがドイツは14年8月23日、独ソ不可侵条約を結んだ。

三国同盟締結の際は「日ソ国交調整に努力する」と約束したのに、仲介どころか、ソ連との戦争に入った。同盟条約第5条の「三締約国とソ連との間に現存する政治協定に何らの影響を及ぼさない」に違反する行為だった。

●独ソ戦に、どの程度の情報を掴み、どう判断したか

▽野村吉三郎駐米大使から「日米諒解案」(4月18日)

大島浩駐独大使は 4月21日

「独ソ開戦近きにあり」と 打電してきた

▽二つの重要電報のうち

近衛首相 政府 軍首脳の関心は「野村電」

「諒解案」を 米国政府提案と 誤解し

日米交渉に 夢中になった

▽独ソ戦は 松岡から 何の報告もないし

陸軍も「第1次大戦で敗れたドイツが

二正面戦争の愚を 繰り返すはずがない」

「大島電」に 格別の留意を 払おうとしなかった

▽日米交渉を 進めるにしても

独ソ戦の新事態が起きたら どうするのか

同時進行で考え 処理すべきテーマだった

▽帰国した松岡は 日米交渉を潰すことに懸命

5月8日には 参内して

「米国が欧州戦争に参戦すれば、日本はシンガポールを撃たなくてはなりません。また米国が参戦すれば長期戦となる結果、独ソ衝突の危険があるかも知れません。その場合は日本は中立条約を棄て、イルクーツクくらいまで行かなくてはなりません」

▽驚いた天皇は 内大臣木戸幸一に

「外相を取り替えてはどうか」と 洩らされた

●陸軍が「もしかすると？」

▽5月13日の 坂西一良(ばんざい・いちろう)駐独武官電

ベルリン派遣の 西郷従吾中佐(せいこう・じゆんご)が

旧知の ドイツ陸軍情報部長から

「独ソ開戦が決定的である」と 知らされた

▽小野寺信大佐(おのてら・のぶ)からも 再三

「英本土上陸作戦はない。

ドイツはソ連に向けて攻撃準備中だ」

…… 小野寺の判断の決め手 ……

イワノフ(ポーランド駐独武官)から、ポーランド領内に集結しているドイツ軍の詳細な配置状況を手に入れた。明らかにソ連を指しており、しかも戦死者収容の棺を大量に用意していた。

野村 吉三郎(のむら・きちさぶろう)

明治10(1877)～昭和39(1964)和歌山県生まれ。海軍大将。大正3年駐米武官。横須賀鎮守府長官を経て昭和7年第3艦隊長官。上海の天長節祝賀式で、朝鮮人に爆弾を投げられ、右眼失明。12年学習院長。14年阿部内閣外相。16年駐米大使となり、開戦直前まで日米交渉に当たる。戦後29年参院議員

大島 浩(おしま・ひろし)

明治19(1886)～昭和50(1975)岐阜県生まれ。陸軍中将。健一中将(けんいち)の長男。昭和9年駐独武官となり日独防共協定を推進。13年大使となり、独ソ不可侵条約で辞任したが、15年再任。A級戦犯で終身禁固刑。30年出所

「大島電」の背景

大島は10日、リッベントロップ外相に呼び出され、「ソ連の出方次第では今年中にソ連に対し戦争を開始することがある」と告げられた。スターマー(三浦武彦)に確認すると「全く口外を禁ぜられており、この場限りのことにしてほしい」と認めた。

ヒトラーは15年12月18日、ソ連攻撃(バルバロッサ作戦)準備命令を出した。訪独中の松岡には、ほのめかしはしたものの一言も洩らさなかった。松岡の方は、ドイツが断念しているのに、英本土上陸作戦が行なわれ成功すると信じていた。独ソ戦の示唆も、日本にシンガポール攻撃を促すためのブラフだと受け取り、東京にも報告しなかった。リッベントロップは、松岡がソ連との政治協定に熱意を見せたため条約締結前にストップをかけようと、大島を呼び出したのだ。

●参謀本部は5月15日、部長会議を開いて検討した

▽岡本清福(おかもと・きよとみ)情報部長は

「独ソ戦はあり得ない」と断言した

敗戦の日に自決した岡本中将

坂西の前に駐独武官を務め、陸軍切っつのドイツ通と言われた。戦争末期、スイス公使館付武官となり対米和平工作に当たったが、「情報の誤りから日本を戦争、敗戦に導き、その罪浅からず」の遺書を残し、ピストル自決した。

▽ドイツ軍のソ連国境集中はソ連に対する

デモンストレーション 外交の後ろ盾

「二正面戦争の愚を犯すはずがない」の先入観

「機密戦争日誌」(録林戦争指導)

「独ソ遽カニ開戦セザルベシ」と会議の結論

●肝心のソ連は、どうだったのか

▽米英は早くから独ソ戦の情報を握っていて

チャーチル(英首相)は4月3日

スターリンに親書を送って警告した

▽スターリンは半信半疑だった

日ソ中立条約を結んだ時点では

「松岡はドイツの了解を取り付けてきたはずだ」

独ソ戦はあるとしてもまだ先のことだと

▽スターリンを慌てさせたのがゾルゲ情報

「独ソ開戦の可能性極めて高し」(5月2日付)

ゾルゲ機関

昭和8年秋、ドイツ新聞特派員の肩書で来日、16年に逮捕されるまで、モスクワに400件の機密情報を送っている。オット(ドイツ人)の絶大な信頼を得て大使館顧問となり、近衛首相の朝飯会のメンバー・尾崎秀実を同志にしたから、その情報は、政治、外交、経済、軍事から国民感情にわたり、詳細且つ確度の高いものだった。

▽来日したニーダーマイヤー(独諜報員)から

「穀倉地帯のウクライナ占領、労働力不足を補うため100万~200万の捕虜確保の目的で、ドイツの侵攻は5月末に行なわれる」

リッベントロップ(Ribbentrop)

1893~1946 ドイツ・ナチ党外交責任者となり、昭和11年日独防共協定締結。13年外相就任。戦後、連合国裁判で絞首刑

ヒトラー(Adolf Hitler)

1889~1945 オーストリア生まれ。第1次大戦後ナチ党党首となり、昭和8年ドイツ首相。一党独裁体制を確立、軍備を拡張、対外侵略を強行し14年第2次大戦を起こす。ベルリン陥落直前に自殺

木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)~昭和52(1977)東京生まれ。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相歴任。15年内大臣。天皇側近の重臣として力を揮い、東条を首相に奏請。戦争末期は終戦に尽力。A級戦犯で終身禁固。30年出所。著に「木戸幸一日記」

小野寺 信(おのでら・まこと)

明治30(1897)~昭和62(1987)岩手県生まれ。陸軍少将。昭和10年ラトビア公使館付武官。参謀本部ロシア課、陸大教官を経て15年スウェーデン公使館付武官となり、敗戦まで終戦工作に当たる

…… ヒトラーは、なぜ対ソ戦を ……

昭和15年7月末、イギリスの空軍力、海軍力から英本土上陸作戦を断念した時、二つの問題に直面した。

一つはアメリカ。参戦阻止に急遽スターマー特使を日本に派遣して三国同盟を結び、牽制させようとした。米国の戦備が整わないうちにイギリスを屈伏させようと、訪独の松岡にも、執拗にシンガポール攻撃を迫った。

もう一つはソ連。イギリスはソ連を味方にしようと画策しており、今ならドイツ機械化部隊の力を以てすれば二、三ヵ月でソ連を始末出来る。ソ

▽スターリンは なりふり構わぬ 対独宥和策
5月6日 モロトフに代わり 首相に就任
反独三国(ベルギー ルーウェー ヌー)の 承認を取り消し
公使館を閉鎖 外交官を国外退去に
イランの親独政権を 承認した

▽ゾルゲ情報は 続いた
日本に立ち寄った シュルツ中佐(タムニ大使館)から
「開戦は6月15日」追いかけて「20日」
▽スターリンは 戦争準備を 急がなかった

運命の22日

スターリンは、黒海の保養地ソチ(2014年冬季オリンピック開催地)で、ヨットで魚釣りを楽しんでいた。護衛艇が全速力で近付き艇長が大声を張り上げた。「只今受信した急報によると、同志モロトフはクレムリンから、「ドイツ軍がわが領内に侵入した」と放送しました。戦闘は目下全国境で進行中であります」
スターリンは一瞬蒼白となって「今やるとは思わなかった」と、叫いたという。

●松岡は、独ソ戦は何としても避けねばと…

▽5月28日 大島に「リ外相に友人として伝えよ」
「この際能う限りソ連との武力衝突を避けられるよう希望す」個人メッセージを送った
▽ドイツ首脳への答えは 強い戦争決意の表明

大島大使の急電

「六月三、四日ニオケル「ヒ」、「リ」トノ会談ノ結果得タル本使ノ印象左ノ如シ(一)独ソ開戦ハ今ヤ必至也ト見ルガ至当ナルベシ(二)開戦ノ時機ニツキテハ短時日ノ中ニ之ヲ決行スルモノト判断セラル」

●6月6日到着した「大島電」は、衝撃波となって政府、軍部内を駆け巡った

▽松岡は まだ 自分の外交構想に こだわった
夜開かれた 大本営政府連絡会議で
「開戦には大義名分を必要とするから、まず条件を出し、開戦するとしてもその後だ」

連を壊滅させればイギリスは戦意を失い、アメリカも介入しないだろう。
ヒットラーは、独ソ戦に戦争早期終結のカギがあると見たのだ。

チャーチル(Winston Churchill)

1874~1965 英国海相、陸相、蔵相歴任。
昭和15年5月首相となり、指導力を発揮して第2次大戦の連合軍勝利に貢献。26年再度首相。28年に「第二次世界大戦」などの著作でノーベル文学賞受賞

スターリン(Iosif V. Stalin)

1879~1953 グルジア生まれ。大正12年ソ連共産党書記長に就任し大量粛清で個人独裁体制を確立。昭和16年、人民委員会議議長(訃)となり対独戦を指導した。死後、専制支配を批判される

ゾルゲ(Richard Sorge)

1895~1944 ドイツ人。ソ連共産党に入党、昭和5年上海で在中国諜報機関を組織。8年来日し16年10月検挙。19年11月7日、「ソ連革命記念日」に処刑された

尾崎 秀実(おさき・ひさみ)

明治34(1901)~昭和19(1944)東京生まれ。大正14年朝日新聞に入社。上海特派員の時、ゾルゲ機関に参加。昭和12年近衛の政策ブレーン「昭和研究会」に入り翌年退社。第1次近衛内閣囑託として中国政策に関与したが、16年逮捕され、19年処刑された。獄中書簡集「愛情はふる星のごとく」はベストセラーになった

モロトフ(V. M. Molotov)

1890~1986 スターリンの側近。昭和5年ソ連人民委員会議議長(訃)となり一時外相を兼務。スターリン死後、32年要職から解任された

▽天皇にも「独ソ協定成立60%、開戦40%」と上奏
▽沸き返ったのは 陸軍中央部

北進論者にも 南進論者にも「千載一遇の好機」

▽種村佐孝中佐(幹輔)は「大本営機密日誌」に
三案に分かれた 議論沸騰を 記録している

「大本営機密日誌」(6月6日)

「独ソ開戦に伴うわが方の態度としては(一)断乎南方武力進出案(二)米国と妥協しつつ北方問題を解決する案(三)南方に対して南部仏印を扼し、北方に対しては在満兵備を強化して対ソ対米英準備陣態勢を確立する案、の三案に大体意見が分かれ、陸軍部内はもちろん、陸海軍間にも議論沸騰し、国論は一向に統一出来ない状態だ。国家の運命は果して何処へ行くのか、深慮に堪えざるものがある」

●「熟柿主義」か「青柿主義」か

▽武藤章(勲)は 佐藤賢了(勲)から

「本当にソ連を攻撃するだろうか」と聞かれ
「まさか」と首を振った「ヒットラーのイギリス本土上陸作戦のハツタリさ。ヒットラーのやり口からすれば、大島を騙すくらいは朝飯前だ」

▽武藤が中心となって纏めた 陸軍省の対応案は
差し当たり 情勢を観望し

有利な情勢が出現したら 武力行使し北方解決
柿が熟するのを待って拾う「熟柿主義」

▽参謀本部は 田中新一(勲)が 北方武力行使
柿は青くても叩き落とせ「青柿主義」

…… 陸軍の「対ソ戦」の考え ……

ヨーロッパからアジアにかけて、広大な領土を持つソ連に対する戦争は、ソ連に「二正面戦争」をやらせることによってのみ、その可能性が考えられるもので、今その好機が到来した。

▽6月16日には 訪独中の山下奉文中将(勲)が
「独ソ開戦は数日後」 決定的な電報

ヒットラーから「日本軍が満州から攻撃して
ドイツ軍の作戦に協力するよう」要請された

▽東条英機陸相からは 厳しい 叱責電報

種村 佐孝(たねむら・さこう)

明治37(1904)～昭和41(1966)三重県生まれ。陸軍大佐。昭和14年参謀本部参謀となり、15年戦争指導班勤務。20年第20方面軍(勲)参謀。シベリア抑留を経て、25年帰国。著に「大本営機密日誌」

機密戦争日誌と大本営機密日誌

昭和15年10月10日、参謀次長直属の第20班(勲)が新設され、慣習的に「機密戦争日誌」を記録した。「大本営機密日誌」は、種村中佐がこれを基に個人的な見解を加え纏めたもの。

武藤 章(むとう・あきら)

明治25(1892)～昭和23(1948)熊本県生まれ。陸軍中将。昭和12年参謀本部作戦課長になり、支那事变拡大を主張。14年軍務局長。日独伊三国同盟、大政翼賛会を推進した。近衛第2師団長を経て19年14方面軍(勲)参謀長。A級戦犯で刑死

佐藤 賢了(さとう・けんりょう)

明治28(1895)～昭和50(1975)石川県生まれ。陸軍中将。昭和4年から3年間米国駐在。14年南支那方面軍参謀副長、北部仏印武力進駐を強行。16年軍務課長。17年軍務局長。19年支那派遣軍参謀副長。A級戦犯で終身禁固刑。31年出所

田中 新一(たなか・しんいち)

明治26(1893)～昭和51(1976)新潟県生まれ。陸軍中将。昭和3年から3年ソ連など、8年からドイツ駐在。12年軍事課長。15年作戦部長に就任し強硬な開戦論を主張。17年のガダルカナル戦で、船舶増徴問題で東条と対立、第18師団長(勲)に転出させられた

山下 奉文(やました・ともゆき)

明治18(1885)～昭和21(1946)高知県生

▽山下は 激怒した「東条という男は、一体我輩を何
とと思っているのだ。いやしくもヒットラーが、視察
団長としての日本の将軍に嘘を言うはずがないで
はないか。まして事は国家の大事だ。陸軍大臣とし
ては、もっと深刻に、真剣に考えなければならぬ」

●陸軍は、独ソ戦の意味を真剣に検討すべきだった

▽三国同盟の核心は 日独とも 米国の参戦阻止
ドイツは 日本に米を牽制させ 思う壺
日本は 日米対立を深め 日米交渉のネックに
▽ドイツの軍事的支援を 期待するには 遠過ぎた
独ソ戦になれば 日独間は遮断され 協力不能に
▽共に「持たざる国」 戦略物資を 期待出来ない
わずかに「ドイツ勝利」の 精神的支えだけ
▽戦略的に考えても ソ連を 米英の陣営に
▽しかも「まさか」と思っていた 愚かな二正面戦争
当然 不利な場合を 想定しなければならない
なぜ「我に有利に展開せば」だけを 考えたのか

— 参謀本部は「ドイツ絶対不敗」が支配的 —

杉田一次中佐(歿)は「ドイツは食糧、石油
の困難に陥りつつあるとか、対英上陸作戦の
見込みはなくなりつつあるなどと言え、そ
れは親米的発言であると評せられる風潮にあ
った」昭和53年「国家指導者のリーダーシップ」

井本熊男中佐(歿)も「顧みれば、ドイツが
大作戦を行うごとに、日本陸軍指導層は興奮
狂喜した。どうすることもできない妄信が固
定していたのであった」昭和53年「作戦日誌で綴る支那事変」

▽「ドイツ勝利」の妄想に とりつかれ

冷静な検討は 全て 棚上げされてしまった

●南部仏印進駐が、6月12日の連絡会議で決まった

▽石油など 重要資源を 蘭印に求めようと
小林一三(前) 芳沢謙吉(元)を 特派し交渉
▽蘭印側回答は 石油180万トン(要380万)
生ゴム1万5千トン(3万) ニッケル鉱15万トン(18万)
ボーキサイト24万トン(40万) 錫3千トン(1万3千6百)
オランダは ドイツ転送を 恐れたのだ
▽連絡会議は 芳沢特使引き揚げを決定(11日)

まれ。陸軍大将。軍事課長、航空総監。昭
和15年末、視察団長としてドイツ訪問。
帰国後、関東防衛軍司令官(副)。16年第
25軍司令官、シンガポールを攻略。19年
第14方面軍司令官になり比島戦を指揮
したが、敗戦後、「マニラ大虐殺」の責任
を問われ、マニラで処刑された

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生ま
れ。陸軍大将。昭和13年陸軍次官。15年
第2次近衛内閣陸相となり、日米交渉で
中国撤兵に反対。16年10月首相に就任。
陸相、内相を兼務し対米英開戦。憲兵政
治、翼賛選挙で独裁体制を固め、戦局悪
化で19年2月参謀総長も兼務したが、サ
イパン陥落で7月総辞職。戦後拳銃自決
を図り未遂。A級戦犯で絞首刑に

…… 山下と東条のやりとり ……

坂西武官発(6月16日)「山下中将より
本日総統大本営に於てヒットラー総
統と面接し、総統から次のような主
旨の要請を受けた。

要旨 ドイツ軍は数日後にソ連に対
し開戦する事に決定した。ヒットラ
ー総統は、日本軍が満州から攻撃し
て、ドイツ軍の作戦に協力されるよ
う希望する。ついては山下中将は速
やかに帰国し、本主旨を日本国政府
に伝え、わが方の希望を実現せられ
たく願います」

武藤軍務局長発(6月17日)「山下中将
に伝えられたい。東条大将は、本職に
対し『かくの如き国家機密事項をヒ
ットラー総統が外交ルートとは別個
に山下将軍に漏らすとは考えられな
い。山下将軍は至急帰国して、委細報
告せられ度き旨伝達せよ』と指示せ
られた。命により伝達する」

▽陸海軍は6日「南方施策促進に関する件」で合意
「もし米英蘭の妨害があれば、米英に対して武力
を行使す」海軍が積極的なのは 石油の苦悩

▽12日 連絡会議提案の時には
「対米英戦争を賭するも辞せず」

▽反対したのは 松岡外相 ただ一人
「これを実行すると米英との衝突になるが、統帥
部はよろしいか」杉山元(参謀長)は沈黙
永野修身(参謀長)が「その場合は起つ。
断乎として米英を撃って出るべきである」

「機密戦争日誌」

「海軍南仏(印)ニ対スル武力行使ハ、対英米戦
争決意ノ成否ト関連シ今迄渋リニ渋リタル所
遂ニ腰ヲ上ゲタリ。但シ対英米戦争ノ決意ア
リヤ否ヤ不明、陸軍モ亦然リ」

▽実際は 陸海軍は 米國を甘く見ていた
蘭印へ出るのなら ともかく 南部仏印までなら
出て来ないだろう 石油禁輸など しないだろう
「戦争決意」は 作文上のことだった

●ドイツ軍のソ連侵攻は、6月22日午前3時15分(東京時間前
10時15分)、1,600kmの戦線で一斉に始まった

▽戦車3,600台を先頭に 瞬く間に ソ連領内を蹂躞

▽松岡は 汪兆銘(国民政府)を 歌舞伎座に招待

加瀬俊一(外務省)が 大島大使の急電をメモし

松岡に渡すと 松岡は 汪に見せ 席を立った

▽ニュースは 電流のように 政府要人に伝わり

軍人は サーベルを鷲掴みにし 出口へ殺到した

参謀本部、軍令部の作戦参謀は…

作戦課合同で大相撲千秋楽を楽しんだ後、築
地の料亭で宴会をしていた。瀬島龍三大尉は、
「久門有文中佐(参謀長)が「ヒットラー誤てり!!」
と大声で叫んだのが印象に残っている」

しかし「機密戦争日誌」が「歴史ノ変転感慨無
量ナルモノアラン。独ソ開戦ヲ祝シツツ血湧
キ肉躍ル」と記録しているように、宴席は盛り
上がり、陸海軍ほとんどの空気は「ドイツが数
ヵ月のうちにソ連を屈伏させるだろう」

林三郎中佐(参謀)は、ソ連の土地の広大な

杉田 一次(すぎた・いちじ)

明治37(1904)～平成5(1993) 奈良県生
まれ。陸軍大佐。米國駐在武官補佐官を
経て昭和14年参謀本部欧米課勤務。第8
方面軍参謀など歴任し、18年欧米課長。
19年作戦課作戦班長。戦後、陸上自衛隊
に入り陸将。35年統合幕僚会議議長

井本 熊男(いもと・くまお)

明治36(1903)～平成12(2000) 山口県生
まれ。陸軍大佐。昭和15年参謀本部作戦
課参謀。東条陸相秘書官、支那派遣軍作
戦課長、第2総軍作戦課長。戦後、陸上自
衛隊に入り陸将。幹部学校長

小林 一三(こばやし・いちぞう)

明治6(1873)～昭和32(1957) 山梨県生
まれ。三井銀行に入り大正7年阪急電鉄
社長。宝塚少女歌劇、東宝映画などを創
設。昭和15年第2次近衛内閣商工相に就
任、蘭印特派大使。戦後幣原内閣國務相

芳沢 謙吉(よしざわ・けんきち)

明治7(1874)～昭和40(1965) 新潟県生
まれ。犬養毅の女婿。外務省に入り大正
9年アジア局長兼欧米局長。中国公使を
経て昭和7年犬養内閣外相。15年蘭印特
派大使。16年仏印大使。27年台湾大使

杉山 元(すぎやま・はじめ)

明治13(1880)～昭和20(1945) 福岡県生
まれ。陸軍大将・元帥。陸軍次官、教育総
監を経て昭和12年第1次近衛内閣陸相。
15年参謀総長。19年小磯内閣陸相。20年
第1総軍司令官。敗戦翌月、拳銃自殺。重
要会議を記録した「杉山メモ」を遺す

永野 修身(ながの・おさむ)

明治13(1880)～昭和22(1947) 高知県生
まれ。海軍大将・元帥。米國駐在武官、軍
令部次長、横須賀鎮守府長官。昭和11年

こと、寒さの厳しさから「本年中にドイツがソ連を屈伏させることは不可能。その後の推移も必ずしもドイツ有利にならず、長期戦必至」の判断を提示したが、参謀本部では作戦優先、情報参謀の意見は無視された。

もともと米陸軍省も、最初は「最小限一ヵ月、予想し得る最大限三ヵ月」とソ連崩壊を予測。

▽松岡が「参内する」加瀬は 木戸(内閣)に

「独ソ開戦」を伝え 拝謁の手配を 依頼した

▽木戸は とっさに 思った

「松岡はシベリア出兵を唱えるに違いない」

松岡より先に 拝謁して「総理と協議せよ」

▽果たして 松岡は「この際ソ連を撃つべきです」

天皇も「即刻総理のもとへ参り相談せよ」

●近衛はこの時、「三国同盟を破棄したら…」

▽戦局が悪化した 19年6月

深井英五(元参謀)が「八日会」(閣議)に
招かれた近衛の述懐を 記録している

近衛の述懐

「三国同盟は日独ソを連絡して英米に当たると云う趣旨で成立したものだ。日独ソの固い結束があれば、アメリカの参戦は阻止し得ただろう。ところが独ソ関係が悪化し、遂に交戦状態に入った。三国同盟の趣旨は滅却した。企画院総裁鈴木貞一と情報局総裁伊藤述史は三国同盟破棄を進言し、自分はこれを五相会議にかけた。当時はドイツの威勢が盛んであったので、破棄の敢行を躊躇したが、三国同盟はその時すでに無意義となった」

▽実際は 五相会議(首・外・農・陸・海)は 開かれていない

近衛から「東条の意向を確かめてくれ」

鈴木が 東条に打診すると「外相次第だ」

▽「三国同盟絶対」の松岡に 押しまくられ

破棄は 政府の問題として 持ち出すことなく

うやむやのうちに 終わってしまった

●連日の連絡会議は、「北進」か「南進」かの論議

広田内閣海相。12年連合艦隊長官。16年4月軍令部総長。太平洋戦争に開戦論を主張。A級戦犯で起訴され、裁判中病死

汪 兆銘(おう・ちやうめい)

1883～1944 字は精衛。日本に留学し法大卒。孫文の下で革命運動に従事し、昭和7年蒋介石との合作政権で行政院長。支那事変中に反共親日の和平運動を起こし、13年重慶を脱出。15年南京に設立された国民政府主席。名古屋で病死

加瀬 俊一(かせ・としかず)

明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生まれ。昭和15年松岡外相秘書官。開戦時北米課長。終戦の時は情報課長。戦後33年ユーゴ大使。著に「戦争と外交」

瀬島 龍三(せじま・りゆうぞう)

明治44(1911)～平成19(2007)富山県生まれ。陸軍中佐。大本営参謀を経て昭和20年関東軍参謀。シベリアに11年抑留。帰国後伊藤忠に招かれ副社長を経て53年会長。中曽根首相のブレーンの一人。臨時行政改革推進会議議長を務めた

林 三郎(はやし・さぶろう)

明治37(1904)～平成10(1998)京都府生まれ。陸軍大佐。昭和14年ソ連駐在武官補佐官。15年参謀本部ロシア課員。16年同課ロシア班長。20年阿南陸相秘書官

深井 英五(ふかい・えいご)

明治4(1871)～昭和20(1945)群馬県生まれ。国民新聞記者を経て日銀に入り、明治37年高橋是清(参謀)に同行し渡英、外債募集に当たった。昭和3年日銀副総裁、10年総裁。13年枢密顧問官となり、戦時中の枢密院の議事を記録した「枢密院重要議事覚書」を残す

- ▽松岡は 強硬に「対ソ開戦」を主張した
「独ソ戦は短期に終わる。まず北をやり次いで南をやるべし。虎穴に入らずんば虎子を得ずだ。宜しく断行すべし」ほとんど 全員が反対
- ▽陸軍省は 支那事変を抱えていて
今すぐ 対ソ戦に踏み切る自信が なかった
49個師団のうち 中国戦線に27個師団
北に割ける兵力は 20個師団くらい
- ▽極東ソ連軍(30個師団) 半減しないと成算が立たない
- ▽海軍も 陸軍の態勢が 北を向いてしまい
南方が おろそかになるのを 警戒した
- ▽北をやるにも まず 南方の資源確保が必要だと
南進論が 優勢になった

- 28日、「情勢ノ推移ニ伴フ帝国国策要綱」を採択
▽「自存自衛のため南方進出の歩を進め
情勢の推移に応じて北方問題を解決する」
両論併記だが 南部仏印進駐の方針を 再確認
- ▽独ソ戦は しばらく不介入 密かに対ソ武力準備
- ▽「この目的達成の為対英米戦も辞せず」
東京裁判で 検事側から
「日本はこの時を以て戦争決意をしたのだ」

- ドイツは「北」から「南」に転換させようと懸命だった
▽大島大使は 29日の電報で リッペントロップが
「対ソ作戦は予期以上に有利に進展し、極めて短期に作戦を終結することは確実だ。時期を失する惧れがあるから、日本の対ソ参戦は遠くないことを希望する」と 電話で申し入れ
- ▽オット(樺太)が 30日 正式に 参戦を要請すると
松岡は 連絡会議で ソ連攻撃を力説した

..... 松岡の発言(「拙稿」が)

「我輩は数年先を予言して的中せぬことはない。南に手をつければ大事になると、我輩は予言する。それを統帥部はないと保証出来るか。南部仏印に進駐すれば、石油、ゴム、錫、米など皆入手困難になる。英雄は頭を転向する。我輩は先般南進論を述べたるも、今度は北方に転向する次第なり」

.....

鈴木 貞一(すぎき・ていいち)

明治21(1888)～平成1(1989) 千葉県生まれ。陸軍中将。軍務局勤務を経て昭和15年興亜院政務部長。16年4月企画院総裁に就任し戦争経済企画の中心になった。A級戦犯で終身禁固刑。31年出所

伊藤 述史(いとう・のぶみ)

明治18(1885)～昭和35(1960) 愛媛県生まれ。外務省に入り昭和8年ポーランド公使。15年第2次近衛内閣で初代情報局総裁。戦後はアジア連絡協会理事長

情勢ノ推移ニ伴フ帝国国策要綱

- (一) 帝国ハ依然支那事変処理ニ邁進シ、且自存自衛ノ基礎ヲ確立スル為南方ニ進出ノ歩ヲ進メ、尚情勢ノ推移ニ応シテ北方問題ヲ解決ス
- (二) 帝国ハ自存自衛上南方要域ニ対スル各般ノ施策ヲ強化ス。之カ為対英米戦備ヲ整へ、先ス「南方施策促進ニ関スル件」ニ抛リ仏印泰ニ対スル諸方策ヲ完遂シ、以テ南方進出ノ態勢ヲ強化ス。帝国ハ本号目的達成ノ為対英米戦ヲ辞セス
- (三) 独ソ戦ニ対シテハ三国枢軸ノ精神ヲ基調トスルモ、暫ク之ニ介入スルコトナク、密カニ対ソ武力準備ヲ整へ自主的ニ対処ス。独ソ戦争ノ推移極メテ有利ニ進展セハ、武力ヲ行使シテ北辺ノ安定ヲ確保ス
- (四) 前号遂行ニ方リ各種ノ施策就中武力行使ノ決定ニ際シテハ、対英米戦争ノ基本態勢ノ保持ニ大ナル支障ナカラシム
- (五) 米国ノ参戦ハ既定方針ニ従ヒ極力之ヲ防止スヘキモ、万一米国力参戦シタル場合ニハ帝国ハ三国条約ニ基キ行動ス。但シ武力行使ノ時機及方法ハ自主的ニ之ヲ定ム

▽松岡は 南部仏印進駐の「6ヵ月延期」を主張
杉山 永野は「断乎進駐」の態度を 変えない
▽すると 近衛が
「統帥部がやられるならばやる」 陸海軍を支持

●「帝国国策要綱」は7月2日、御前会議で決定された
▽近衛は 配布書類に 自ら 記入している

「南部仏印進駐は強硬論を抑えたるものなり」
手記にも「多少代償的な意味で

南部仏印進駐を認めた」と 書いている

▽目先の「対ソ参戦」の火の粉を 払うのに懸命で
南部仏印進駐の 深刻な影響は 楽観していた

●参謀本部は「関特演」(關特演)で対ソ戦準備に
▽7月1日 防空部隊 要塞高射砲部隊要員を召集
5日には 本土防空のため 防衛総司令部を新設

陸軍の「対ソ戦」プログラム

参謀本部は対ソ戦に踏み切る目安を、30個師団の極東ソ連軍がドイツ戦線に送られ半減した時、航空兵力2,800機が三分の一になった時とした。また冬のシベリアの制約を考えれば、開戦は9月初め、8月上旬には意思決定とした。

▽7月7日「関特演」の第1次動員に 踏み切った
関東軍33万を83万に 内地留守部隊も14万増員

動員は極秘に行なわれた

機密保持のため、動員令の伝達は電報に代えて手紙。出征兵士の見送りも町内会を通じて、「家族1人、町内会代表1人。旗、幟を立ててはいけない」と通達した。鉄道輸送を「関特演」に集中させるため、夏休みの学生、生徒の旅行も全面的に禁止した。しかし、朝鮮を通過する兵隊が一日1万人、馬3,500頭、軍用列車が10数本北上。50万人の大動員は隠しようがなかった。

●米ソは、7月2日の御前会議決定を知っていた
▽アメリカは「マジック」と名付けた
日本の外交暗号解読で その日のうちに
▽ソ連も 10日には「ゾルゲ情報」で

オット (Eugen Ott)

1889~1976 ドイツ陸軍少将。昭和8年日独交換武官として来日、9年大使館付武官となり、13年大使に昇進。三国同盟を推進したが、ゾルゲ(煇燾)がスパイで逮捕されたため、17年解任された

..... アメリカは「参戦意思」を

米軍は7月7日、突然北大西洋の島アイスランドに進駐した。ソ連へ武器・軍需品輸送路確保のためドイツ軍のアイスランド侵攻に先手を打ったもので、米國がドイツを敵とし、ソ連の同盟国になったことを、明示するものだった。読売新聞ニューヨーク特派員小林雄一は「アメリカ自身の「参戦の序曲」と見てよい」と、的確な分析をしている。

..... 天皇は「戦争準備」を心配された

防衛総司令部が、世界に戦争準備の印象を与えるのでないか — 杉山に「いまどき、これを特設する必要があるのか」「これを外部に公表しないだろうね」と念を押され「陸軍が何でもやってしまうことが往々にしてあった。軍の権力を振るうための機関となりはせぬか」とまで指摘された。

御前を下がった杉山は、田中(作樂)に「二・二六事件以後、天皇の陸軍に対する不信を思い知らされた」

グルー (Joseph Clark Grew)

1880~1965 アメリカ外交官。トルコ大使を経て昭和7年駐日大使。満州事変後の日米関係改善に努力。開戦で帰国、国務省極東局長、次官、国務長官代理を歴任、天皇制存続に尽力。著に「滞日十年」

..... グルーの日記から

ある電鉄会社の如き、一週間に運転手が五十人も召集されたことを聞いた。

- ▽極東ソ連軍が 西に移動するはずも なかった
- ▽ヒットラーは 7月4日「ソ連戦勝利演説」
- 破竹の勢いのドイツ軍は 11日
- スモレンスク(モスクワ300km)に 迫ったところで
- 戦線は膠着化し 長期戦の様相

「機密戦争日誌」

独ソ戦ノ推移明快ヲ欠ク。東京連日ノ雨ニ似タリ
スターリン政権ノ強靱性、予期ニ反シ強シ

- ▽「熟柿」を拾う好機は ついに 到来せず
- 参謀本部は 8月9日「年内対ソ武力発動」を断念

●「陸軍悪者」説が、半ば定着している

- ▽「海軍は日米開戦に反対だったが、
- 陸軍が強引に戦争に引きずり込んだのだ」
- ▽満州事変を起こし 盧溝橋事件を支那事変に拡大
- 戦争の種を蒔いたのは 全部 陸軍だった
- ▽しかし 日米戦になれば 舞台は太平洋 海の戦い
- 米内光政が海相時代「日本の海軍は、米英を
- 相手にして戦うようには造られていない」
- 海軍が「ノー」と言えば 日米戦は出来なかった
- ▽日本は 南部仏印に進駐し 石油禁輸の制裁
- 東条は 東京裁判で「自存自衛のための戦争」
- 「石油を断ったアメリカが、
- 日本を戦争に追い込んだのだ」の声も
- ▽石油を断たれて 困るのなら
- 南部仏印に 進駐しなければ よかったのだ
- ▽「南進」の流れを 決定的にしたのは 海軍だった

●米内が海相時代(昭和12年2月～14年8月)の海軍は…

- ▽山本五十六が次官 井上成美が軍務局長
- 三国同盟に 反対しただけではなく
- 日本を 対米戦に 持って行かないようしていた
- ▽昭和16年頃は 米内は現役を去り
- 山本は連合艦隊長官 井上は航空本部長
- 海軍の 政策決定の立場に なかった
- ▽海軍省 軍令部の課長クラスは
- 親独・反米の強硬派で 固められ
- 抑えるべき 大臣は及川古志郎 総長は永野と
- 定見のない 部下の言いなり首脳部に

……「関特演」の無駄遣い ……

使われた軍事費は10億円。太平洋戦争開戦直後、昭和17年1月の戦時増税法案で決まった増税額が11億円だったから大変な額。小銃は三八式(昭和13年製)から、九九式(昭和14年製)に切り替えられ、膨大な資材が満州に送り込まれた。これらの資材は、戦局の悪化と共に次々と南方に移送されたが、敗戦の時、半分の量が残っていた。

米内 光政(よしか・みつさだ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。昭和11年連合艦隊長官となり、12年林内閣海相、第1次近衛、平沼内閣に留任。15年1月首相に就任したが、三国同盟に反対し陸相辞職で7月総辞職。19年7月現役に復帰し、小磯、鈴木内閣海相となり、終戦和平に尽力した

山本 五十六(やまもと・いそく)

明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。米国駐在武官、航空本部長を歴任。昭和11年海軍次官。14年連合艦隊長官となり、開戦劈頭のハワイ・真珠湾攻撃を立案、実行した。前線海軍基地を視察中にソロモン諸島上空で米軍機に撃墜され戦死。死後元帥、国葬

井上 成美(いのうえ・せいよし)

明治22(1889)～昭和50(1975)宮城県生まれ。海軍大将。昭和12年軍務局長となり三国同盟に反対。15年航空本部長。17年海兵校長、英語教育継続を貫く。19年海軍次官に就任、終戦工作に当たった

井上の言葉

日本海軍の軍備は、アメリカと戦うための準備ではない。アメリカをして、日本と戦をすれば生易しいことではすまぬ、相当手強いぞと思わせて、理不尽な

▽山本は 三国同盟締結に 危機感を強め
15年11月初め 及川(淵)に 手紙を出し
海軍を「対米不戦の態勢」に 建て直すため
米内を現役に戻して 軍令部総長にし
古賀峯一を次長 井上を次官に 強く進言
▽及川は 大改革に取り組む意思是 毛頭なく
軍令部総長は 16年4月 序列に従い永野に

●「親英第一」の海軍が、なぜ急速にドイツに傾斜

▽一つは ワシントン会議(1919年)

ロンドン会議(1905年)以来の 反米英感情

青年将校には 戦艦の比率を「五・五・三」

六割海軍は「米英の押しつけ」と映った

▽もう一つ 流れを変えた 日英同盟廃棄(1911年)

ポッカーリ開いた穴にドイツが入ってきた

きっかけは、第1次大戦のドイツの戦利品(潜水艦と飛行機)だった。軍縮後の海軍には充実させたい戦力。ここに目をつけたのが、青島で捕虜になり四国の収容所に送られた武器商人のフリードリッヒ・ハック。(戦争末期、スイスで藤村義朗海軍中佐を助け、ダレス機関(米)を通じての和平工作に奔走した)

ハックは日本に残って武器輸出会社を設立、ドイツ海軍に働きかけて日独海軍の情報交換を実現させた。ドイツは、ベルサイユ講和条約で軍用機の保有、研究を禁止されており、日本に航空技術、研究者を送り込むことは、将来の空軍再建に向けて絶好の抜け道となった。

「スパイ王」カナリスも来日していた

ドイツ保有の潜水艦Uボートは、戦勝国に配分されたが日本への割当ては7隻。神戸の川崎造船所でUボートをモデルに「伊号潜水艦」を建造したが、技術指導に大正13年7月カナリス少佐(1887~1945)が派遣されて来た。

その際「日本海軍を支援すれば英仏などを牽制し、国益につながる」と日本海軍との連携強化を進言している。昭和10年1月国防軍諜報部長官になり、リッベントロップ動かして、満州国承認、中国への武器援助を中止させた。

事をアメリカが日本に迫ることのないようにするのが、第一義だ。

及川 古志郎(おゆ・こしろう)

明治16(1883)~昭和33(1958)岩手県出身。海軍大将。横須賀鎮守府長官を経て昭和15年第2次近衛内閣海相。18年海上護衛総長官。19年軍令部総長

古賀 峯一(こが・みねいち)

明治18(1885)~昭和19(1944)佐賀県生まれ。海軍大将。軍令部次長、第2艦隊長官、横須賀鎮守府長官を経て、昭和18年4月山本戦死の後を受け連合艦隊長官。19年3月パラオからダバオへ移動中、搭乗機が墜落して殉職。死後元帥

山本から古賀への手紙

…上層部に誰を求むべきか米内、古賀、井上等の蹶起なくしてはとても六(む)かしかるべし夫(それ)でも参戦といふときは真に已むを得ざる場合とあきらめ敢然起つの外なかるべく候。
(16年1月23日附)

…… 大きかった日英同盟の恩恵 ……

日本海軍は、イギリス海軍の全面的支援を受けて発展してきた。第1次大戦までの主力艦の大半は、戦艦三笠、巡洋戦艦金剛などイギリスから購入したか、その造艦技術を導入して建造された。ことに日英同盟(1902年1月)からは、海軍協定で3年に1人の割合でグリニッチ海軍大学校に留学させることが出来た。平賀譲など、軍艦設計の名手は皆この造船科出身。

敗戦後の日本を、近代的造船王国にし、技術国家にしたのも、この留学生であり、イギリスから軍艦と共に導入された技術だった。

カナリスは昭和19年7月20日のヒットラー暗殺未遂事件に連座し、絞首刑になった。

▽海軍の海外派遣も 新技術導入と共に ドイツへ 発展期のナチス・ドイツを見た 青年将校には ヒットラーのもと「一致団結した国家」と

●海軍に親独派が増え、影響力を強くしていった

▽中心になったのが 石川信吾大佐
山口県出身で 同郷の松岡外相と親しく
昭和6年には「大谷隼人」のペンネームで
満蒙の重大性を訴えた「日本之危機」出版
近衛の「昭和研究会」に招かれ 時局談
▽15年12月 国防政策担当の 軍務第2課長に
「常軌を逸した行動が多い」 反対が出たが
同郷で中学の先輩 岡敬純(鞆眼)が 押し切った
▽岡も親独派で 二人とも 熱心な南進論者

●海軍省・軍令部の意思統一に「第一委員会」

▽たった 4人の委員会だが
幅広い人脈を持つ 石川がリード
海軍の重要政策は ほとんど ここで決まった
▽及川や永野は 重要書類が 回ってくると
「第一委員会を通ったかどうか」を尋ね
通過済みのものは そのまま 承認した
▽「海軍を変えた」と 言われるのが
昭和16年6月5日「第一委員会」で纏めた
「帝国海軍ノ採ルヘキ態度」
▽和戦 いずれかの決意を 示す時機が来た
和戦のカギを握るのは 海軍にあるとして
「直ちに戦争決意を明言し、
強気を以て諸般の対策に臨むを要す」
▽対米英作戦の基地として「泰仏印に対する
軍事的進出は 一日も速やかに断行するを要す」
▽陸軍も すぐ乗ってきて「帝国国策要綱」に

●「米英恐るるに足らず」の世論誘導も始まっていた

▽平出英夫大佐(鞆鞆課長)は 海軍記念日(5月27日)に
「われに艦艇五百余 海鷲四千余あり
必殺戦法われに在り」と 勇ましいラジオ放送

平賀 讓(ひらが・ゆずる)

明治11(1878)～昭和18(1943)広島県生まれ。海軍造船中将。明治38年英グリニッチ大で造船技術を学び、戦艦陸奥、長門、重巡古鷹、軽巡夕張を設計して、「軍艦の父」と言われた。昭和13年東大総長

藤村 義朗(ふじむら・よしろう)

明治40(1907)～平成4(1992)大阪府生まれ。海軍中佐。昭和15年ドイツ駐在武官補佐官。20年3月スイス駐在武官となり、ダレス機関と和平交渉に当たった

日本海軍の海外派遣先

(留学生・武官・艦官・造船官)

	日英同盟解消前	解消後
ドイツ	73	155
イギリス	457	172
アメリカ	120	163

岡 敬純(おか・たかずみ)

明治23(1890)～昭和48(1973)山口県生まれ。海軍中将。昭和13年軍務局第1課長となり、軍令部第3部長、軍務局長、海軍次官として戦争指導に当たる。A級戦犯として終身禁固刑。31年出所

…… 平出(鞆課長)の「海戦の精神」 ……

「もし万一敵性国家群の経済圧迫が我が方の生存権を侵すに至った場合には、帝国としては自衛上当然蹶起せねばならぬと思われる…海軍の整備の状況は将に有史空前のもの…軽々しく我に挑戦する者あらばこれを一挙に粉碎せんとする姿勢にある」

このラジオ原稿は、翌日の朝刊各紙に大きく掲載され、東京日日は1面をほとんど埋め尽くした。ただ1紙、1行も載せなかったのが朝日。海軍担当杉本健記者は同盟通信の配信原稿を見て「これはひどい。これじゃ海戦の

▽実際の戦力は どうだったのか

軍艦は掃海艇まで 飛行機は練習機まで
掻き集めた数字で 作戦機は千機もなかった
最新鋭の「ゼロ戦」(零艦上戦闘機)は 300機
開戦時に やっと 565機だった

●海軍中枢の考えは、相変わらず「大艦巨砲主義」

▽16年1月 軍令部は 海軍首脳会議に
「第5次軍備充実計画案」を 提案した
大和型戦艦3隻 空母3隻など
159隻建造と 軍艦中心だった
航空兵力は 作戦機1,320機 練習機2,138機生産
▽井上成美(艦政本部長)は「海軍の空軍化」を提言
▽「日米未来戦図」は 太平洋戦争で 現実のものに
「艦隊決戦思想」の軍令部には 無視された

●南部仏印進駐のため陸軍は第25軍、海軍は第2支那派遣艦隊を編成、海南島に集結命令

これがなぜ、大問題になったのか

南部仏印は、軍事的には東南アジアの扇の要だった。北部仏印のハノイからだど、マレー半島のクタバルまで1,600キロあって、南方作戦の基地にならない。それが南部仏印からなら500キロ足らず。航続距離2,460キロのゼロ戦、2,800キロの九七式重爆撃機のらくらく攻撃範囲。

だからこそ、日本の陸海軍が欲しがったのだし、蘭印との石油交渉でも大きな圧力になる。同時に、アメリカが黙っているもなかった。

▽7月5日 海軍局長会議で

南部仏印進駐を報告すると 猛烈な反対が続出

▽井上は とっさに思った

「これは大変なことになった。アメリカと戦う覚悟なしには、こんなことは出来ない」

「海軍がなぜ、簡単に同意したのか。なぜ、事前に我々に諮らなかつたのか。3日も経ってから事後報告するなど、言語道断だ」

▽豊田副武(艦政本部長)も「決定の日、自分は出張中だったが、電報を寄越せば引き返して反対した。艦政本部長は海軍省の番兵ではないぞ！」

精神じゃなく、開戦の精神だ」
デスクに話してボツにさせた。

井上の「新軍備計画論」

(一) 航空機の発達した今日、これからの戦争では、主力艦隊と主力艦隊の決戦等は絶対に起こらない。

(二) 巨額の金を食う戦艦など建造する必要なし。敵の戦艦など何程あろうとも、我に十分な航空兵力あれば、皆沈めることが出来る。

(三) 陸上航空基地は絶対に沈まない航空母艦である。航空母艦は運動力を有するから使用上便利ではあるが極めて脆弱である。次の海軍航空兵力の主力は基地航空兵力にすべきである。

(四) 対米戦に於ては陸上基地は国防兵力の主力であって、太平洋に点在する島々は天与の宝である。

(五) 対米戦ではこれ等の基地争奪戦が、必ず主作戦になることを断言する。換言すれば上陸作戦並びにその防禦戦が主作戦となる。

(六) 右の意味から基地の戦力の持続が何よりの大切なる故、基地の要塞化を急速に実施すべきである。

(七) 従って又、基地航空兵力第一主義で航空兵力を整備拡充すべきである。これが為戦艦、巡洋艦の如きは犠牲にしてよろし。

(八) 次に日本が生存し、且戦を続ける為には、海上交通の確保は極めて大切であるから、これに要する兵力は第二に充実するの要あり。

(九) 潜水艦は基地防禦にも通商保護にも攻撃にも使える艦種なる故第三位に考えて充実すべき兵種である。

▽艦隊長官 鎮守府長官の説明会でも

古賀峯一(第2艦隊)が「こんな重大な事を我々艦隊長官の意見も聞かずに決めてしまったのは、どういことですか。こんなことで、さあやれ、と藪から棒に命令されたって、勝てませんよ。いったい、軍令部は何を考えているんですか」

▽永野(第1艦隊)の答えは

「政府がそう決めたんだから仕方がないだろう」

▽海軍トップが これでは 主戦派の意のままに

●野村大使も、危機感を募らせていた

▽7月3日の電報で 北進にも南進にも

「日米開戦の一手手前迄行く」と 警告したが
松岡は 握り潰し 政府首脳に 注意しなかった

▽10日には 海軍の後輩及川に

「東西南北皆敵になる」 及川には 糠に釘だった

●南部仏印進駐の外交交渉は、7月14日からビシー(フランス共和国)に移っていたフランス政府と始まった

▽ところが 近衛内閣は 16日夜 突然

松岡外相罷免のため 内閣総辞職をした

▽ハル(駐米大使)は 6月21日

オーラル・ステートメントで「松岡忌避」
松岡を外すことで 日米交渉に誠意を

●第3次近衛内閣は、7月18日発足したが…

▽外相には 豊田貞次郎(前首相 豊田)が

「松岡さえ除けば」 近衛の判断は 甘かった

▽豊田は 海軍次官時代 三国同盟に

慎重だった海軍を 賛成に踏み切らせた張本人

▽就任すると 在外大使に「既定方針に変更なし」

「三国同盟堅持」の打電を アメリカは解読

▽フランス政府に対する 最後通牒

南部仏印進駐の「回答期限23日」も 筒抜けに

▽外相を 誰にしようと

アメリカの態度が 変わるはずもなかった

●アメリカ側の不信感を煽った「マジック情報」

▽ハルは「相手側の手の内を

居ながらにして目撃出来る貴重な鏡」

豊田 副武(とよだ・そむ)

明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大将。軍務局長、第2艦隊長官を経て昭和14年艦政本部長。呉、横須賀鎮守府長官を歴任、19年連合艦隊長官。20年軍令部総長。戦犯として巣鴨に拘置されたが、24年無罪になった

野村大使の電報

7月3日「モシ独ソ戦争ニ関連シテ南方武力行使ヲ為サルル決意ナリトセバ日米関係調節ノ余地ハ全然ナキモノト観測セラル…モシ過早ニ而モ独ト提携シテ独ソ戦争ニ参加スル事ハ日米関係ヲ急速ニ悪化セシメ日米開戦ノ一手手前迄行く惧ナシトセズ」
及川海相宛て 10日「今ノ儘ニテハ日本ハ米英ソ支蘭ノ凡テヲ敵トシ東西南北皆敵トナル虞レアリ、今ヤ真ニ十字路ニアリ…コノ際思イ切ッテ自主的に難局打開ヲ講ズルノ必要ヲ痛感ス」

松岡罷免劇

松岡任命の際「松岡の外相はどうだろう」と、天皇から二度も注意されていた近衛は、不明を認める形の更迭、内閣改造をとらず総辞職を選んだ。抜き打ちに臨時閣議を招集して閣僚の辞表を取り纏めたが、松岡はあらかじめ病気を理由に欠席、印鑑を内閣書記官長に預けて進退を一任した。

松岡の「サヨナラ会見」

読売社会面トップの見出しが「小鳥友に山籠り、“坊主メ”と感慨の一句残して」記事は「坊主メが行き倒れたりつゆの旅」 — 一句うかんだよ、この二セ坊主メが梅雨どきの旅で倒れちまひやがったんだ、この二セ坊

▽野村大使が どんなに 誠意を見せても
 解説された外交暗号が 裏切っていた

— ドイツから「盗まれている」と警報 —

駐米ドイツ大使館は4月28日、「絶対確実な筋からの通報」として、本国政府に報告した。「国務省は日本の暗号体系のキーを持っており、東京から野村大使宛て及び大島大使から東京宛て電文を解説している」

▽外務省は 大島からの連絡で 5月5日
 野村に 問い合せたが「暗号の管理は厳格に
 行なわれており、洩れた形跡は認められない」

▽外務省は 14年2月から 東京—ワシントンの
 外交通信に「九七式欧文印字機」を使っていた
 ▽「絶対破られない」と 外務省自慢の暗号機械
 外務省も野村も 洩れたとすれば

それ以前の暗号機を 使ったものだと
 ▽結局 暗号管理の 厳しい規則を作っただけで
 敗戦まで 同じ暗号機を 使い続けた

…… 愕然としたのはアメリカの解説チーム ……
 どこから洩れたのか。とりあえず「マジック」
 の配布先を大幅に制限した。「どうもお喋りの
 大統領が危ない」というので、ルーズベルトに
 は要約したものだけにして解説原文を配るの
 を止めた。要約文を読む大統領には、日増しに
 開戦に傾斜していく日本の切迫感が伝わらな
 くなった、との見方もあるが、最大の問題点は
 表と裏で違うことをやっていたことだった。

●フランス政府は7月21日、「南部仏印進駐」を受諾した

▽大本营は 23日 陸海軍部隊に進駐命令

▽幣原喜重郎(元相)は 近衛に「船を台湾かどこかに
 戻して、そこに待機させることは出来ませんか」

▽近衛は「御前会議で論議を尽くして決定したこと
 だから、今更翻すことは出来ない」

▽幣原が「それならば、私はあなたに断言します。こ
 れは大きな戦争になります」

近衛は 目を白黒させ「しばらく駐兵するとい
 うだけで戦争ではない。それではいけませんか」

主がナ」コツンと右指で頭を叩いて
 松岡さんが笑った。この事務引継ぎ
 の朝、霞ヶ関ヲ去る松岡さんが外務
 省二階応接間で顔なじみの記者団と
 サヨナラ会見である。「また一句うか
 んだよ。“ひととせを無我夢中つゆ明
 けず”ほんとに無我夢中だった。この
 梅雨は世界的な梅雨だ。どこの国も
 まだ梅雨は当分明けんワイ。そこで
 な、このニセ坊主メが半分も行か
 んで往生しやがった。こりゃダビに
 でもふしてほんとの坊主の生まれ変
 ってこねば駄目だらう、ニセ坊主はな」
 戦犯として起訴された松岡は、肺結
 核が悪化して巣鴨プリズンから東大
 病院に移されたが、昭和21年6月66歳
 の生涯を閉じた。辞世の句は「悔もな
 く怨もなくて行く黄泉(よみ)かな」

ハル(Cordell Hull)

1871～1955 ルーズベルト大統領時代
 昭和8年から19年にかけて国務長官。164
 11月、日米交渉で「ハル・ノート」を提
 示、日本側は最後通牒と見て開戦に。日
 連創設に尽力の功績でノーベル平和賞

豊田 貞次郎(とよだ・ていじろう)

明治19(1886)～昭和29(1954) 神奈川県
 生まれ。海軍大将。駐英武官、軍務局長
 航空本部長を経て昭和15年海軍次官。
 第2次近衛内閣商工相、第3次内閣外相
 20年鈴木内閣軍需相兼運輸通信相

幣原 喜重郎(ひげら・きじゅうろう)

明治5(1872)～昭和26(1951) 大阪生
 れ。駐英・駐米大使を経てワシントン
 議全権。大正13年以来、加藤(副)、若
 浜口内閣外相を務め、国際協調、平和
 交を展開、ロンドン条約を成立させた
 20年10月首相。進歩党総裁となり、24
 衆院議長。著に「外交五十年」

▽近衛は 外交手続きを踏み 銃火を交えずに
進駐するのだからと 軽く 考えていたので

●野村大使からも、連日、悲鳴のような電報

…… 野村大使の警告電報 ……………

7月23日「我が南進ノ場合…国交断絶ノ一歩手
前迄行クモノト認メラル。当方ノ対日空気急
変ノ原因ハヤガテシンガポール、蘭印ニ進ム
第一歩ト認ムルニ在リ」

24日「大統領ハ従来輿論ハ日本ニ対シ石油ヲ
禁輸スベシト強ク主張セシニ、自分ハ之ヲ太
平洋平和維持ノ為ニ不可ナリト言ウテ説得来
リシガ、今ヤ其ノ論拠ヲ失フニ至レリト述ベ
テ、石油ノ禁輸アルベキヲ仄メカシ…」

▽豊田(外相)は 24日の連絡会議で

石油の懸念を指摘したが 軍部は 楽観的だった

「機密戦争日誌」

「野村ヨリノ電「ヒステリック」ナルニ一驚セ
ルナランカ、当班(競争指導)全然不同意」

▽アメリカは 25日夜

在米日本資産の凍結を発表 翌日から実施

「機密戦争日誌」

25日「当班仏印進駐ニ止マル限り禁輸ナシト
確信ス」26日「当班全面禁輸トハ思ワズ、米ハ
セザルベシト判断ス、何時カハ来ルベシ、ソノ
時機ハ今年早々ニハ非ズト判断ス」

●第25軍の進駐は、予定どおり28日から始まった

▽日仏軍事協定により 日本軍は

サイゴン プノンペンなど 8カ所の空軍基地
カムラン湾 サイゴン湾の使用 軍隊駐屯権

▽野村大使が 弁明に 國務省を訪ねると

ハル(総機中)は ウェルズ(副機中)に

日米交渉打ち切りを 通告させた

「これは南西太平洋に全面的な攻撃を行なう前
の最後の通告だと思われる。日米交渉を継続す
る基礎はなくなったと思われる」

天皇も心配されていた

(昭和天皇御勅) 丁度我が進駐部隊が海
南島に集結中で呼び戻そうと思へば
余裕のある時であったので私は蓮沼
(蕃)武官長を通じ、東条に対し、国内
の米作状況が極めて悪いから、若し
南方からの輸入が止ったら国民は餓
死するより外はない、進駐は止める
様に言はせたが、東条は承知しなかつた。
…日本が南部仏印に進駐すれば、
米国は資産を凍結するといふ事は
河田(烈)大蔵大臣には判つてゐた
が当時蔵相は連絡会議に加つてゐな
かつた為、意見が云へなかつた、それ
に近衛は財政の事情は暗いし結局私
は軍部の意見しか聞く事が出来なかつた、
今から考へるとこの仕組みは
欠陥があつた。

[大本營政府連絡會議]首相、外相、陸相、海相、參謀總長、軍令部
總長の6名を不動の構成員とした。

河田 烈(かた・いさお)

明治16(1883)～昭和38(1963)東京生まれ。
大蔵次官、拓務次官。昭和9年岡田内
閣書記官長。15年第2次近衛内閣蔵相。
19年台湾拓殖会社社長

グルー大使の電報

グルーは26日、豊田外相と会談して
本国政府に報告した。「ありのままに
受けた印象は、外相を含む日本人は、
いつも米国による報復の可能性を割
引して考えている」

…… ABCD包囲陣 ……………

資産凍結にはイギリス、カナダ、蘭印
も続き、28日には蘭印が石油協定の実
施を延期した。蘭印から石油が来なく
なり、軍部が国民の敵愾心を煽るため
盛んに宣伝した「A(米)B(英)C(中)D
(蘭)対日包囲陣」が形成された。

▽ハルは 戦争決意をしたのだ 回想録に

「それから後、日本に対する我々の主な目的は、国防準備のために時を稼ぐことであった」

- アメリカは8月1日、食糧、綿を除いて石油を含む一切の対日輸出禁止を発動した

▽戦争指導班は 26日の日誌の欄外に

「本件ノ判断ハ誤算ナリ、参謀本部亦然リ、陸軍省亦然リ」朱筆で 書き加えた

▽誤算も誤算 太平洋戦争招く 大誤算だった

- 中でも、海軍は深刻だった

▽石油備蓄量(8月1日現在) 940万トン

軍艦は 停泊しているだけでも

発電で 1日1万7千トンを消費する

▽「じり貧論」と共に

「座して死を待つより打って出るべし」

対米開戦論が 強くなっていった

▽陸軍も「関特演」どころではなく

関心は 一挙に アメリカに集中

- 近衛も大きな衝撃を受け、日米首脳会談で…

▽有田八郎(少将)から「日米交渉と南部仏印進駐政策とは、両立しがたい矛盾政策ではないか」

▽有田への返書で

問題は 陸海軍中堅層以下にあるとし

「天祐神助」を 首脳会談に 賭けようとした

▽首脳会談を思いついたのは 富田健治(閣議書記)

伊藤(閣議書記)に相談すると「非常に名案だ」

▽近衛も 晴れ晴れとした顔で

「陛下より全権を委任されて、アメリカで全てを大統領と決めて来る以外、途はありませんね」

- 近衛は、「聖断」による中国撤兵を考えていた

▽軍部は 到底 中国撤兵を 承知しそうもない

▽木戸(内相)の話では

「トップ会談で話がついたら、それを僕の所へ電報を寄越す。陛下に申し上げ、陛下が御嘉納になれば、陛下の命令で軍隊を撤兵する」

▽8月4日 東条 及川を招いて 打診した

事実上の経済断交

日本は、すでにヨーロッパとの貿易は遮断され、中南米の軍需物資輸入も、米英の買い占めで途絶状態になっていた。日本の国力、戦力の源泉を断ち切った全世界的禁輸だった。

「機密戦争日誌」

「沈思苦慮ノ日続ク。一日ノ待機ハ一滴ノ油ヲ消費ス。一日ノ待機ハ一滴ノ血ヲ多カラシム」

有田 八郎(ありた・はちろう)

明治17(1884)～昭和40(1965)新潟県生まれ。外務次官、ベルギー、中国大使。昭和11年広田内閣外相となり日独防共協定締結。13年第1次近衛内閣で外相に再任され、平沼内閣にも留任、三国同盟に反対した。15年米内内閣外相。戦後28年衆院議員。東京都知事選(30年、34年)に社会党から出馬したが落選した

近衛の有田宛て返書(8月3日付)

「…矢は弦を離れたる形にて最早如何とも能わず。ただし日米国交調整の見地よりすれば、蘭印なら兎も角、仏印なら大した故障なかるべしとの見透しが、陸・海とも一致したる見解にて、この見透しが誤り、今回の如き結果となりし事遺憾至極に存居候。

政府としては、御話の如く矛盾したる考を有し居らず、何とか国交調整してこの難局を打開せんと考へ居るも、問題は陸海軍中堅層以下にあり、統制がどこまで利くかといふ事に帰着致候。物資の問題その他の見地より、この際自重すべきことを、政府として凡ゆる手を通じて統帥部に諒解を求めつつあるも、どこまで奏功するやわからず、ただ天祐と神助を頼むのみ」

▽近衛は「尽くすだけ尽くして、ついに戦争となるのなら、我々の腹も座り、国民の覚悟も決まる。世界にも誠意を披瀝したことになる」

そして「独ソ戦が膠着化すれば、ドイツの将来は危ういものとなり、アメリカの鼻息も荒くなる。日本との話し合いに応じなくなるから、一日も早く対米の手を打つことが急務だ」

▽及川は その日のうちに 全面的賛成

東条は 条件付賛成「いよいよの場合、断乎対米一戦の決意を以て臨むなら、陸軍としても敢えて異存を唱える限りではない」

▽天皇も喜ばれ「大統領との会見は早い方がよい」

●南部仏印に進駐した後では「時遅し」だった

▽野村大使が 8月8日 首脳会談を申し入れると

ハルは「日本の政策に変更のない限り、話し合いの根拠はない」と 冷たかった

▽ルーズベルトは 北大西洋カナダ沖で

英戦艦プリンス・オブ・ウェールズのチャーチルとの 洋上会談に

▽17日 帰って来たルーズベルトは 二つの文書

一つは「かかること申したくないが…」

「日本が軍事的支配の政策を進める場合、合衆国は時を移さず、必要と認める一切の手段を講ずる」明らかな 戦争警告だったが

野村が「本使限りの参考迄貰い受けたり」と

打電したため 東京は格別 問題視しなかった

▽もう一つは 日本政府の政策を

明瞭なステートメントにして 提示してほしい

▽首脳会談については

「ジュノー(アラスカ)はどうだろう」乗り気な姿勢

▽日本政府は さっそく 会談準備と

大統領宛て 近衛のメッセージの作成に

▽全権団首席随員は 土肥原賢二(輝) 吉田善吾(輝)

日本郵船の「新田丸」が用意された

石井秋穂陸軍大佐の述懐

私は随員の内命を受けた時、実に悲しいやるせない思いをした。近衛「ル」会談する。近衛頑張る。「ル」容れず。近衛は東京に向け之以上は出来ませんと電報する。三宅坂突っ張る。然し

富田 健治(とみだ・けんじ)

明治30(1897)～昭和52(1977)兵庫県生まれ。昭和13年長野県知事の時、近衛に認められ第2次、第3次内閣書記官長。16年貴族院議員。追放解除後、27年から自由党衆院議員。著に「敗戦日本の内幕」

近衛は「悲壮な決意」で

意見を求められた伊沢多喜男(隠微)が「これをやると、殺されることが決まっているが…」「生命のことは考えていない」「生命のみでなく、米国に日本を売ったと言われるだろう」「それでも結構だ」伊沢は「結局ルーズベルトが百分の四十アメリカを売り、近衛が百分の六十日本を売ることになる」

若槻礼次郎(元帥)「後で陸海軍が反対すると困るから、参謀総長、軍令部総長を連れて行く事が絶対条件だ」

若槻 礼次郎(わかき・れいじろう)

慶応2(1866)～昭和24(1949) 島根県生まれ。蔵相、内相を歴任、大正15年首相。昭和2年の金融恐慌で総辞職。ロンドン会議全権を務め、6年再び首相に就任したが、満州事変の処理に追われ辞職

土肥原 賢二(どいばら・けんじ)

明治16(1883)～昭和23(1948)岡山県生まれ。陸軍大将。昭和6年奉天特務機関長となり、関東軍の政治工作担当。教育総監、第1総軍司令官。A級戦犯で処刑

吉田 善吾(よした・ぜんご)

明治18(1885)～昭和41(1966)佐賀県生まれ。海軍大将。昭和12年連合艦隊長官となり、14年阿部内閣海相。米内、第2次近衛内閣に留任したが、病气辞任。支那方面艦隊、横須賀鎮守府長官歴任

陛下が御裁定になり、万事休する、と云うのが私の政治的見透しであった。

▽陸軍は 半ば「聖断撤兵」を 覚悟していたのだ

●ルーズベルトの真意は、どうだったのか

▽8月14日 チャーチルとの洋上会談で

共同宣言(歟「煙囪」^{と訛る})を 発表した
中立国アメリカの宣言は 明白な戦争決意

▽ルーズベルトは チャーチルに

「日本を適当にあやしておく」

ソ連の抗戦力が 最終的に 確認されるまで
日米交渉を続けることで 時間稼ぎを

●首脳会談は、ついに挫折した

▽8月28日 野村が

近衛の「早期会見希望」の メッセージ手交
ルーズベルトは「非常に立派なもの」と称賛
「近衛とは三日間くらい会談したい」

▽しかし 夜になって ハルが

「予め大体の話を纏めた上で、
首脳会談で最終的に決定する形にしたい」
つまり「ハル四原則」を 詰めること

▽それでは 話が進まないから

「直接会談で一気に解決を」と 考えていたのに

▽9月4日 ルーズベルトのメッセージが届いた

「基本的且つ枢要な諸問題につき、速やかなる予
備討議をなして、慎重を期することが必要だ」
首脳会談は「その後だ」と言うのだ

▽近衛にとって「中国撤兵」の決定は

首脳会談の舞台装置で 初めて 決行出来るもの

▽海軍は 9月1日 戦時編成 有事即応態勢に

陸軍部内も「開戦一色」に 染まっていった

大西洋憲章

領土不拡大、主権尊重、侵略国の武装解除など8項目から成り、反ファシズムの戦争目的と戦後の世界秩序の枠組みを明らかにした。

「ハル四原則」

昭和16年4月16日、ハルは、日米交渉に入る前提として、野村大使に「領土保全と主権の尊重、内政不干涉、機会均等、太平洋の現状維持」の四原則を日本政府が採用する意思があるかどうか、確認を求めていた。

厳密に適用すれば、満州事変から支那事変に至る日本の歩み、既成事実、否定されることになる。野村が当初、この四原則を日本政府に伝えなかったため、交渉混迷の原因に。

「独ソ戦勃発と南部仏印進駐」関係年表

昭35	1902	1. 30 日英同盟調印	昭和16	1941	6. 5 海軍第一委「海軍ノ採ルヘキ態度」
37	1904	2. 10 露に宣戦布告。日露戦争始まる			6. 6 大島大使から「独ソ開戦必至」電届く ◆陸海軍「南方施策要綱」を決定
38	1905	9. 5 ポーツマスで日露講和条約調印			6. 11 連絡会議、蘭印回答を不満とし芳沢謙吉特使の引き揚げ決定
大正3	1914	7. 28 第1次世界大戦始まる			6. 12 連絡会議「南部仏印進駐方針」決定
7	1918	11. 11 ドイツ降伏。第1次大戦終わる			6. 16 山下奉文中将に「独ソ開戦は数日後」
8	1919	6. 18 戦利品の独潜水艦7隻、横須賀回航 6. 28 ベルサイユ講和条約調印			6. 21 ハル、対日回答と松岡忌避の口上書
10	1921	12. 23 日英同盟廃棄			6. 22 独軍、ソ連に侵攻、独ソ戦始まる
11	1922	2. 6 ワシントン会議で海軍軍縮条約調印			6. 24 陸軍、南部仏印進駐の第25軍編成
13	1924	7. 22 独カナリス少佐、潜水艦指導に来日			6. 28 連絡会議「情勢ノ推移ニ伴フ国策要綱」採択(対ソ戦準備・南部仏印進駐)
昭和5	1930	4. 22 ロンドン会議で海軍軍縮条約調印			6. 30 オット独大使、日本の対ソ参戦要請
6	1931	9. 18 柳条湖で満鉄爆破。満州事变始まる			7. 2 御前会議「帝国国策要綱」を決定
7	1932	3. 1 満州国建国宣言 5. 15 五・一五事件。犬養毅首相射殺される			7. 5 陸軍、防衛総司令部を新設◆海軍局長会議で南部仏印進駐に反対続出
8	1933	1. 30 ヒットラー、独首相に就任 3. 4 米第32代大統領にルーズベルト就任 3. 27 日本、国際連盟を脱退			7. 7 「関東軍特種演習」の第1次動員発令◆米軍、北大西洋のアイスランド進駐
11	1936	2. 26 二・二六事件 11. 26 日独防共協定調印			7. 11 独軍、スモレンスク攻防戦
12	1937	7. 7 盧溝橋事件勃発。支那事变始まる			7. 14 仏ビシー政府と南部仏印進駐交渉
14	1939	5. 11 満蒙国境でノモンハン事件起こる 7. 26 米、日米通商条約の廃棄を通告 8. 23 独ソ不可侵条約調印 9. 1 第2次世界大戦始まる			7. 16 近衛、松岡罷免のため内閣総辞職 7. 18 第3次近衛内閣。外相に豊田貞次郎 7. 21 仏、日本軍の南部仏印進駐を受諾 7. 23 第25軍に南部仏印進駐を発令
15	1940	3. 30 汪兆銘の国民政府、南京に成立 6. 22 フランス降伏、独仏休戦協定に調印 7. 22 第2次近衛内閣成立。外相松岡洋右、陸相東条英機、海相は吉田善吾 9. 17 ヒットラー、英本土上陸作戦を断念 9. 23 日本軍、北部仏印に武力進駐 9. 25 米、日本の外交暗号解読 9. 26 米、屑鉄の対日輸出を全面禁止 9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印 11. 5 米ルーズベルト大統領三選される 11. 15 海軍、政策立案の第一委員会組織 12. 18 ヒットラー、対ソ開戦準備を命令			7. 25 米、在米日本資産を凍結(英も26日資産凍結、蘭印は28日石油協定を停止) 7. 28 日本軍、南部仏印に進駐開始 8. 1 米、対日石油輸出を全面禁止 8. 4 近衛、陸海相に首脳会談の構想打診 8. 8 野村大使、日米首脳会談申し入れ 8. 9 参謀本部、年内の対ソ武力行使断念 8. 14 米英首脳が「共同宣言」(大西洋憲章) 8. 17 ル大統領、野村に対日戦争警告文 9. 1 海軍、戦時編成。有事即応態勢に移行 9. 3 ル、日米首脳会談を事実上拒否
16	1941	3. 12 松岡外相、独伊ソ訪問に出発 4. 13 日ソ中立条約、モスクワで調印 4. 18 野村吉三郎駐米大使から「日米諒解案」の電報。日米交渉始まる 4. 21 大島浩駐独大使から「独ソ緊迫」電 4. 30 ヒットラー、対ソ攻撃開始日を5月25日から6月22日に変更 5. 2 ゴルゲ「独ソ開戦の可能性高し」急電 5. 6 スターリン、ソ連首相に就任 5. 13 駐独武官から「独ソ開戦決定的」電 5. 15 参謀本部「独ソ早期開戦なし」と結論 5. 28 松岡外相「独ソ戦回避希望」を打電	17	1942	11. 7 ゴルゲの死刑執行
			20	1945	2. 4 米英ソ三国首脳、ヤルタ会談。ソ連は独降伏後、対日参戦の秘密協定 5. 7 独、連合軍に無条件降伏 8. 8 ソ連、対日宣戦布告。満州から侵攻 8. 15 敗戦 12. 16 近衛、戦犯に指名され自殺
			21	1946	6. 27 松岡、東大病院で死去。66歳